



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945 年生まれ。1968 年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004 年に退職。Facebook 上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



コックピット(cockpit)

「cockpit」とは元々「闘鶏場」の意味だ。cock は「おんどり」、pit は「囲い」を意味している。そこから小さな戦場や古戦場を意味するようになり、飛行機が本格的に使われるようになった第一次世界大戦中に「操縦席」を指すようになったのである。計器類がたくさん並んだ狭い中で作業する姿は「ばたばた」しているように見え、まるで闘鶏場を動き回る「おんどり」のようでもある。

今では飛行機だけでなく、ロケット、レーシングカー、カヌーなどの操縦席も「コックピット」という。

タイタニック号で生き残った日本人

1912 年 4 月に起きたタイタニック号の沈没事故後、ある英国人乗客が手記にこう記していた。「一人の日本人が他人を押しつけ、無理やり救命ボートに乗った」。タイタニック号に乗り合わせていた唯一の日本人・細野正文氏は、救命ボートに乗り込んで助かったものの、生涯「卑怯な生存者」という汚名をきせられた人物だ。

細野氏は 1912 年当時、日本鉄道院の主事を務めていた。ロシア、英国での研修を終え、英国から米国へ向かうタイタニック号に乗り合わせていたのだ。彼は帰国後、高官職を罷免され、鉄道事務員に降格。1939 年、世間の冷たい視線を浴びる中で他界する(享年 68)。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

しかし、1941年、事故にまつわる細野氏の手記が発見され、細野氏は批判されるような行動をとっていなかったことが判明、遺族が彼の名誉回復に向けた取り組みを始める。事故当時、細野氏が乗ったのは10号救命ボートで、無理やり乗り込んできたと言われた英国乗客の救命ボートは13号であった。実は当時10号救命ボートには2人分の空きがあり、ボートの順番を待っていた三等客室の乗客とともにその場にいた二等客室乗客の細野氏には優先権があったのだ。1997年、細野氏の手記は米国のタイタニック号研究財団の検証を経て事実と証明された。

事故で多くの方が命を落としたため、生きて帰った細野氏は、罪悪感もあったと思われるが、弁解しなかったのは彼の武士道精神と考えられている。

なお、ミュージシャン細野晴臣は細野正文氏の孫。晴臣はタイタニック沈没100年目となった2012年に事故犠牲者の共同墓地があるカナダのハリファックスを訪れ、追悼式典に参加している。



音位転換について

「新しい」は何と読むか？・・・「くだらないことを聞くな」と言われそうだが、では「新た」は？



実は「新しい」は奈良時代には「あらたしい」で読まれていたが、平安時代に「あたらしい」となった。このように、一語中の音の位置が変わってしまう現象を「音位転換」という。

ほかに「音位転換」が定着した言葉としては、山茶花(さんざか→さざんか)、舌鼓(したつづみ→したづつみ)、しだらない→だらしない、秋葉原(あきはばら→あきはばら、「秋葉山」のあった原の意味)などがある。

象牙の塔

「象牙の塔」は、19世紀フランスの作家で批評家のサント・ブーヴが、現実社会から離れて学術に没頭している学者を評して言った言葉。

日本では、研究熱心のあまり日露戦争が起きたことも知らなかった明治物理学の祖、長岡半太郎(湯川秀樹をノーベル賞候補に推薦したことで知られる、1950年没、享年85)が「象牙の塔」の代表的存在とされている。

現在では、現実とかけ離れた世界を皮肉る言葉として用いられているが、(個人的には)マスコミ受けする学者よりも偏屈な「象牙の塔」タイプの学者の方が好ましいと思う。





白眉

三国志の中の「蜀・馬良伝」によると、蜀の馬氏の五人兄弟は秀才揃いで、いずれも字(あざな)に「常」の字を用いていたことから「馬氏の五常」と呼ばれていた。中でも最もすぐれていた長男の馬良は、眉に白い毛が生えていたことから「馬氏の五常、白眉最も良し」と人々に言われていた。

ここから多くの中でもっとも際立って優れた人や物を「白眉」というようになったのである。なお、「泣いて馬謖を斬る」で有名な諸葛孔明の部下の馬謖は馬良の末弟である。

几帳面(の語源)

几帳面という言葉は室内でお姫さまなど貴人の座るそばに立て、間仕切りや風除けに用いられた家具「几帳」に由来する。「几(おしまずき)」は脇息の意。几の長い横木に「帳(とぼり)」をかけたものが「几帳」である。

几帳の柱は、怪我の予防と装飾の意味から、角を丸く削るという細工が施されていた。この面を作る作業がたいへんに難しかった。ここから「几帳面」が「きちんと」という意味に転じたのである。几帳面な人でないとできない厳しい仕事だったのだ。